あさ 3

2023

亀田虎童子

一合をもてあましたる雪見酒

雪晴れや目鼻先立て歩みくる

寒明けや予定なかりし予定表

歩けない足にも足袋の新しく

赤い椿白い椿は何処なる

絵ごころのなかりし絵にも春の風

あを

三月集

どっちの

佐藤　竹僊

林中の色を濃くして曼殊沙華

あるはづの柵のむかふの芋の露

秋の雨眠りにすこしねむり足し

おそ秋や雨が降るには空が要る

枯草に柹の落ちたるつぶれたる

露頂から赤らみはじむ帚草

皇帝ダリアは皇帝ダリアといふ名が嫌ひ

帚草あとは雪待つばかりなり

十二月踏切はさみ人の立つ

耳掻の代りをさがす年の夜

骨壺は片手で持てぬ年一夜

音にしてギギギギギッギ霜柱

鱈ふた切買ひてもどりて灯をともす

けふはどっちの踏切にせう梅の花

死んだから何時でも会へるしだれ梅

寒

赤座典子

願ひ事一つ入れ替ふ初詣

大吟醸加へてまろき屠蘇酒かな

成人の日の午後の静けさちぎれ雲

積雪と予報の日々の燕居かな

むべなるかな白い御飯と寒卵

金柑の種を許せる甘さかな

強がりを遺せし友よ寒紅梅

寒三日月刀架にひたと収まれり

癸卯

秋川泉

初鴉声の響きて夜明けかな

初護摩の炎は高く濃くなりぬ

護摩堂の清々しさや初明り

晴れやかに歳徳神のおはします

三が日中華料理の恋しけれ

お供へや三日目のひび深くなり

灯油売り餅焼く手止め今日の値は

癸卯はづみをつけて苦を越えよ

去年今年

七郎衛門吉保

仕舞湯に草津の素の小晦日
初茶の湯親子三代菓子選び
ラジオから箱根駅伝若湯かな
願ひごと多くなりけり初詣
七の持つ力に願ふ薺粥
翳し見る手に三ミリの初氷
大寒波ヒートテックに鍋料理
厚氷今朝は使へぬ手水鉢

みつしりと

篠田純子

寶船神みつしりと乗合へる
藪柑子ビルのはざまの路地暗し
蕎麦屋より貰ふレトロな新暦
大旦菩提寺の僧笑まひをり
大鷹野縄張主張の群れ鴉
大寒の銭湯バブルを腰に当つ
藤穂さんに椿の庭で会へさうな

天を指す

篠田大佳

お正月ぼくもやさしくなりたいな

正月や街懐かしむホームレス

寒月や水の雫は三度跳ね

剥き出しの鉄骨天を指して雪

晩冬や明日が怖いこともある

未来のサイズ

須賀敏子

初読みは『未来のサイズ』俵万智

突然にエアコン壊れ初買ひに

雪催ひ明日は検診予約の日

土手に咲く水仙人の立ち止まり

寒ぬくし今日は返却本を背に

手袋や小指短め私の手

大試験無事に終はりて皆安堵

乗蓮寺

都築繁子

階の手摺りの冷えや参拝す
東京大仏拝する安堵寒に入る
松過ぎの龍の居座る手水鉢
目礼を交わす木道野水仙
いつからか長寿となりぬ福寿草

吹雪

長崎桂子

穏やかや朝日に映える実千両
手入れ良き尼寺にひととき年新た
物価高模索対応の睦月かな
睦月の卒寿なり全てに感謝の合掌
初場所や軍配さばきの見事なり
吹雪いて積雪や閉じこもり英気を
零下に凍てし朝初めて此の地区を
朝日さす令和五年世界平和を

雑詠

森なほ子

冬温し犬の喪中といふハガキ

最終巻初読みとせむ残しおく

灰汁(あく)抜いてあくを掬ひて節料理

蕎麦啜り一繋がりの去年今年

去年今年何か忘れてきたやうな

元旦や去年は記憶の中にのみ

新聞の嵩に驚くお元日

恙無きことのみ願ひ初暦

一月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

おぼろげな記憶に降るは牡丹雪　　亀田虎童子

なんと儚げでうつくしい作品だらう。作者にとって大切な、大事な思ひ出なのであらう。百歳に手の届かんとする齢になって心に刻み込んだ思ひ出も不確かなものになり、残るは経緯はおぼろでも忘れてはならぬところは、はっきりしと記憶してゐる。その記憶の中に鮮明に牡丹雪が降ってゐる。（喜孝）

この句は事実か創作かはわからないが、牡丹雪はめったに降らない特別な雪。非日常的で祝祭の雰囲気がある。だから何の記憶かはおぼろげであっても背景の牡丹雪だけがしっかり残っているのだろう。この牡丹雪は動かない。（なほ子）

重ね着の重ね過ぎたる朝御飯　　亀田虎童子

二〇二二～二〇二三年は寒さが厳しいと予報されている通り、寒いです。例年の重ね着で良いと思ったら、どんどん寒くなってきて、気がついたら頭が重ね着に埋もれて、食事が大変なくらい重ね着をしてしまったという景を想像しました。寒さが厳しい時をユーモラスに描いています。（大佳）

コスモスにハガキがとどく鳥渡ゆれ　　佐藤竹僊

佐藤先生らしいファンタスティックな句。メルヘンの世界の味わい。ハガキを届けたのは風、差出人は誰？と、想像が広がるのも楽しい。

恥ずかしいのだが、私は「鳥渡」が読めず、「鳥渡れ」の誤植かと勘違いしてしまった。この漢字をお使いになる意味があるのだろう。（なほ子）

自轉車と人の踏切秋日和　　佐藤竹僊

私道のような小さい道の踏切を想像します。自動車が我が物顔で道路を走り、人と自転車は片隅に追いやられているという息苦しさを前提にして、自動車が踏切にいないことに安堵しているようです。（大佳）

昼下り冬の根菜三種煮る　　長崎桂子

冬の日暮れは早いので、早々と夕餉の支度にとりかかる。さて三種の冬野菜は何と何？　三種と限定したところがちょっとクイズのようで楽しい。（なほ子）

朝日さし白湯ゆるゆると冬に入る　　長崎桂子

冬になったなと思ふやふな寒さを覚える朝。白湯を淹れた湯飲をやはらかくてのひらで包みこむ。「ゆるゆると」は白湯を飲む動作ではあるがそれだけでは収まらぬ「ゆるゆると」である。（喜孝）

村人は紅葉の中に暮らしをり　　森なほ子

前句「初雪をぺらと乗せたり浅間山」を受ければ、遠景の中に木々に囲まれた村落が見えてきます。紅葉の中に小さな人々がいるようで、村落の中にありそうな悲喜交々が、ユーモラスに見えてきます。（大佳）

のどかな山村。のどかさに適ふゆったりとした諷詠ぶりである。村人のくらしのなかに作者も溶け込んでゐるやうだ。大自然の営みに添って暮してゐる村人に作者はあこがれを持たれてゐるのだらう。（喜孝）

子と孫と同じ神社の七五三　　赤座典子

子の時と同じ神社でお孫さんの七五三を祝っているとふと数十年の月日が一気に巻き戻されるようだ。子の時はまだ若い母親だった。

神社はいつもそこにあり、自分たちの人生を見守っているようだ。（なほ子）

橋桁の太きつららや遊覧船　　赤座典子

広重は多様な視点から橋を描いてゐるが、橋を見上げた構図は知らない。面白い視点からの作品。

広重が遊覧船に同乗してゐたらどんな浮世絵がと想像してしまひました。（喜孝）

音もなく銀杏降り敷く阿弥陀堂　　秋川　泉

銀杏落葉が積み重なった阿弥陀堂で、しばし耳を澄ませていると、落葉の音は聞こえない。しんとした落葉の積み重ねなのに、落葉から音が聞こえてくる阿弥陀堂の様子を想像しました。（大佳）

義経の腰越の磯鳥渡る　　秋川　泉

時代小説はよく読むが史実を基にした話には疎い。いつもの通りネットで「腰越の磯」を勉強。妻が脇に入れば滔々としゃべりだすところ。義経が足止めをされ鎌倉に入れず頼朝に「腰越状」といふ依頼文を出すが結局京へ引き返したとのこと。その間の事は作者読み込み済みで何もいはず「鳥渡る」とされた。義経は最後モンゴルへゆきジンギスカンになったさうだ。「鳥渡る」がおもしろい働きをしてゐる。外連味のない作品。（喜孝）

ＳＤＧｓわかりわからぬ宵の秋　　七郎衛門吉保

最近の教科書は、ＳＤＧｓに絡めてテーマを設定しているようで、教育現場では何かしらの伝達がされているようです。一方、メディアを通じて伝え聞くＳＤＧｓは「もったいない」以外のメッセージがない気がします。もっと広いメッセージがあるようなのに、無視されている寂しさを「宵の秋」に感じます。（大佳）

新包丁試みに切る花梨の実　　七郎衛門吉保

新しい包丁の〝試し切〟では少々おぞましくなる。「試しに切る」あたりの表現が正に穏当である。慣れぬ新調の包丁で意外に硬い花梨に挑戦する作者。試みに切られた花梨は花梨酒にでもなるのだろうか。（喜孝）

今朝の冬工事現場の怒号凍つ　　篠田純子

冬の早朝、作者の生活圏の工事現場も稼働しているようです。人の動きも少なく、天気も良いのでしょう。工事現場から怒号が聞こえてきます。工事現場は危険が多く、命にも関わります。そんな緊張感が冷たい空気に乗り、凍てつくような響きが朝に残ります。（大佳）

今朝の冬蝶のむくろの千代紙めく　　篠田純子

〝如く俳句〟も表現法は様々工夫されてゐるが、詩のひとつの発想法であり表現法であらう。似たもの同士のの比喩だと心ときめかぬが、この句、句会で初見したとき、心ときめいた。生物の部位とは思へぬ、蝶やトンボの羽。羽化したては蛹の中で、折りたたまれた羽に体液が行き渡るにつれビニール傘を広げたやうにピンと張り詰める。そして花から花へ飛びまはり子孫を残す。

越冬する蝶もあるが、純子さんは冬に入ったと思はれる寒さの中で、蝶のむくろを見つけられた。質感といひ視感といひ、千代紙は言い得て妙。見立て俳句も捨てたものではない。（喜孝）

つはぶきや馬鹿になりたいときもある　　篠田大佳

一見して作者のほかの四句とは違い、わかり易い。作者の心情をそのままつぶやいている。つわぶきが動きそうだが、華やかさはないが存在感のある逞しそうな花が、馬鹿になりたくてもなれない生真面目さに似合っている。（なほ子）

ＡＩの描く水星のもみぢかな　　篠田大佳

理解し得たとは云い難いが、興味の深い作品。人工知能に絵を描かせるといふニュースを聞いた。どこが面白いのだらう。俳句などあっといふ間に何万句も排出することだらう。作者の感性が水星の紅葉の風景を描いた。作者の内なるＡＩが描いた光景である。水星と紅葉、二つの言葉が交差する光景である。面白い発想の広がりを期待する。ホルストが「惑星」を音で描いたやうに、見ぬ風景を描く俳句を作ってみたくなった。「令和四年の私の一句」で大佳さんがＡＩについて書かれてゐる。ご一読を。（喜孝）

綿虫の只一匹を追ひかけて　　須賀敏子

綿虫は群れて浮遊しているが、一匹だけの綿虫が飛んでいるのを見つけ、思わずあとを追いかけた。群れを離れてどこへ行くのだろう？

この綿虫は何かの象徴とも読めるし、そう読みたい気もするが、作者が実景ですと言われるのを聞いてしまった。（なほ子）

ままならぬ日も有りてこそ柚子は黄に　　須賀敏子

人生思ふやうに行かぬのが常。この句の「ままならぬ」事は、人生云々といふ大げさなものではない。「日もありて」と日常の思ふに任せぬ小事である。作者は「さういふ日もありてこそ」の日常だと悟られてゐる。柚子が時を得れば黄色く熟すやうに。（喜孝）

カフェオレの消えないハート冬浅し　　都築繁子

喫茶店のラテアートでしょうか。寒くなってきて、ミルクの脂が溶け残っているのか、ラテアートが残っているようです。ハートが残る様子は、消えそうで消えない人間の情熱を想起して、あたたかな気持ちになります。（大佳）

ひとり居の早めの夕餉冬菜漬　　都築繁子

身辺の高齢者に聞くと概ね夕食は早いやうです。私も作者に劣らず早い。元気に仕事をしていた頃は八時ごろに食べていたが、今は早く日が昏れないかと待ちわびてゐる始末。好きなおかず

で炊き立てのご飯。これに勝る物はない。最近作ったあまり美味ではない手作りの蕗味噌でも大満足。お米は北海道の〝ひとめぼれ〟がお気に入り。

これはいつの間にか繁子さんの句を借りて私事を書いてしまった。（喜孝）

令和四年のわたしの一句

秋爽や神の降臨地鎮祭　秋川泉

この句は、俳句としては、しごく当然の事を云っている駄句と思いますが、私にとっては本当に大切な句になりました。訳あって、我が家はただいま小さなアパートを普請中。地鎮祭まで漕ぎ着ける苦労を、夫が一身に務めてくれました。私は、お祝い事などそのほとんどを真言密教の加持祈祷で執り行う法の場におりましたので、此度の神主さんが地鎮祭をしてくださることにとても感動致しました。本当に神々が降臨下さり、土地を清め、祝福して下さったのだと、心から思える素晴らしい日となりました。そして、この句は、ここまで頑張ってくれた夫への感謝とさまざまに御力をかして下さった方々への「ありがとうございます」と言う思いの記念の句となりました。

鰻屋の柾の俎柾の下駄　篠田純子

句会で先生と恭子さん（多分）、吉保さんにに取っていただきました。銀座の鰻店の俎は柾目の通った、三寸（10 cm）の厚み。大将も板さんも柾目の下駄を履いてる。鰻を捌いたり、たまにすっぽんを捌いたり、朝からキビキビと働きます。

龍の玉ちょっと転んだだけなのに　須賀敏子

この句は令和四年『あを』一月号「はしたて集」に投句したものです。令和三年秋、転んで背骨を圧迫骨折、酷いめにあいました。

そして令和四年十二月、自宅の庭でけつまずき再び圧迫骨折、何という悲劇でしょう。

Ａーによぎる死想や夏の夜

篠田大佳

折に触れてＡーについて考えています。Ａーの研究と称して、Ａーに俳句を作らせる試みがいくつかあるようです。今の段階では、学習した言葉を編むことができても、カードに言葉を書いて何枚かをランダムに取り出すようなところまでで、それがいい句かどうかは人間によって判断しなければならない状況のようです。Ａー俳句は「選句」をどのように評価するかの課題があり、現段階では、人間の表現の補助をする段階でしかないように思います。ただ、絵の分野での議論を借りれば、今後Ａー俳句が商業的な需要を満たすようになれば、人間の「何故俳句を作るのか」という切実な思いが、より重要になってくるのではないでしょうか。

Ａー研究では、機械に人格を移す実験というのもあるようで、死に瀕した人格をＡーに移植して延命を図るとなると、そのＡーには死を想い、死を怖れる思考がインプットされる可能性があります。掲句は、Ａーは自らの死をどのように思考していくのか、ということを考えて詠んだ句です。「夏の夜」は怪談が多く語られる季節でもあり、何かと目に見えない未来のことをぼんやり考えてしまう季節のような気がします。

衰へぬ草の育ちや秋溽暑

長崎桂子

令和四年の九月の末より体調を崩し、持病の悪化でしばらくの間の毎日の生活は、とても難儀で困難な毎日でした。

デパ地下の松茸売場みてるだけ

都築繁子

新宿伊勢丹で買物の折、ぶらりと立寄った松茸売場。篭に入った松茸の六万円の値札に思わず、二度見しました。

昔、同僚の知り合いの山へ数人で松茸狩に行った事、秋には八百屋の店先に松茸が並び、土瓶蒸しやお吸物など、松茸は今より身近にありました。

松茸の高値を前に昔のことを思い出した一刻でした。

八月の眩しきものにはだへかな

佐藤竹僊

〝八月〟に入ると毎年のことだが身が緊まる。

八月の六日九日十五日

この句は表記の差はあっても複数の人に詠まれた俳句。珍しい事例である。このやうに多くの人が〝八月〟を重くれて受け止める。本来健康的な季節のはずだが……。掲句は〝八月〟が担ってゐる重石を取ってみたく詠んだ。

それにしても「安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから」といふ碑文も、その後の人類のありさまを見て悲しんでゐることだらう。人類といふ大きな生き物が繰り返す戦争。今起きてゐるウクライナへの侵略にしても怒りのやり場がない。この〝大きな生き物〟は戦争といふ癌細胞で自滅するのだらうか。

戦争と御出來おできを我慢する　竹僊

炑收集

逃げるたび翅つよくなる雀の子　亀田虎童子

＊＊＊

帚草あとは雪待つばかりなり　佐藤　竹僊

夕月はピンクゴールド降誕祭　森　なほ子

ポインセチア一掃されてシクラメン

干蒲団屈託も無くふくふくと　赤座　典子

霜柱はらり傾き花蕊めき

寒風や前こごみして前こごみ　秋川　泉

冬夕焼異世界の道表れる　七郎衛門吉保

山茶花やさんざ散り落ちまた咲けり　篠田純子

里芋の皮剥き残る母の汁　篠田　大佳

椰子の木にうつすら雪の積もりけり　須賀敏子

葱刻む役は夫に譲りけり

柚子湯して帯状疱疹癒えにけり　都築繁子

所在なきベンチがひとつ冬紅葉　長崎桂子

黒雲へ太陽切り込む年の暮

喜孝抄

世

行く秋を惜しみ懐古す明治の世　木村茂登子
四五年はこの世に長居豆を撒く　堀内　一郎
大朝寝この世の他の人に逢ふ　篠田　純子
殊更に菠薐草は世に知られ　遠藤　実
紅つつじ世にかかはらず咲き出し　芝宮須磨子
世に疎きことをたのしむ青瓢　竹内　弘子
已にして苧殻のこの世ならぬ軽さ　竹内　弘子
不確な世が世なれど年を行く　遠藤　実
彼の世にもつぎの風くるまで芒　佐藤　恭子
綿虫や世になきものを恋ひわたる　田中　藤穂
次の世も付き合ふ人か彼岸晴　遠藤　実
夢の世に木枯偲ぶ花筵　阿部　寒林
この世での母は紫実むらさき　篠田　純子
松の内見すぎ世すぎはさておきて　木村茂登子
世のために役立たぬ身や夏怒涛　阿部　寒林
晩秋の彼の世此の世のあはひかな　須賀　敏子
花吹雪この世で会へぬ人想ふ　早崎　泰江
つくづくと世渡り下手やシクラメン　井上　石動
少子化の世とも思へず衣被　赤座　典子
現人の世の腸は四葩いろ　佐藤　恭子
知らぬ世へ招く雪吊並木かな　井上　石動
平らかでなき世でありぬ独楽澄める　赤座　典子

あの世めく踊の手振り盆の夜　田中　藤穂
暗殺の今もある世に春一番　田中　藤穂
次の世は一芸欲しや猫じゃらし　田中　藤穂
命日や夏蜜柑見ぬ世となりぬ　田中　藤穂
奈良の世の瓦に文字冬の雨　須賀　敏子
鳥達の世は変はらずに雲の峰　田中　藤穂
電話帳の友みなあの世風の盆　七郎衛門吉保
アフリカに飛蝗の跋扈威と異の世　七郎衛門吉保
八十路兄あの世とやらに雁渡る　篠田　純子
この世から手離す悔いや花の冷　七郎衛門吉保
一人逝き右に傾く溽暑の世　七郎衛門吉保

句末の「よ」

ほんものの伊勢海老飾るめでたさよ　斉藤　嘉久
風薫る賢治の作る地や空よ　上條　幸子
山藤の濃い花房の短さよ　芝　尚子
稲刈機唸りどほしのしづけさよ　竹内　弘子
どくだみと誰が付けたか可哀想だよ　関口　智也
花いまだ名札万葉の菖蒲田よ　関口　ゆき
老鶯やちらりと里に帰りしよ　後藤　志づ
落葉焚禁じられたる淋しさよ　早崎　泰江
春一番反戦の声届けてよ　須賀　敏子
凍解の川越えて逃げ帰り来よ　竹内　弘子
南国のビールグラスの大きさよ　赤座　典子

鳳仙花前髪離さぬやうにせよ　東　亜未
借景の影の部分の綿虫よ　渡邉　友七
隼に追はる白鳩生き延びよ　篠田　純子
きさらぎや夫のマスクの大きさよ　須賀　敏子
飾り太刀男はかつこ良く生きよ　木村茂登子
震災忌あのカンバンを撤去せよ　篠田　純子
夕焼けのひろごりひろごる稲架組めよ　定梶じょう
新しき家建ち雪のふることよ　須賀　敏子
風花の空に拡がれオーロラよ　芝　尚子
ポポポンと鳴いてゐるかや筒鳥よ　木村茂登子
良夜なり戯画の鳥獣現れよ　田中　藤穂
草餅の手作りといふ大きさよ　渡邉　友七
忘却の遠目かなたの葉桜よ　竹内　弘子
海老蔵の坊主頭の涼しさよ　定梶じょう
夜光虫詩となることばわき出でよ　田中　藤穂
蜆汁涙おとすなおとすなよ　木村茂登子
つつじ満開何も彼も良く過ぎし日よ　早崎　泰江
霜解道横切る猫のすばやさよ　竹内　弘子
万愚節うからやからの減りたるよ　藤野　寿子
新茶汲む次郎長ばなしちゃっきりよ　東　亜未
お茶つみや富士の笠雲雨ずらよ　木村茂登子
屋久杉の一枚天井涼しさよ　佐藤　喜孝
床の間の一休見上げぐ涼しさよ　木村茂登子

土用東風物干し上るうれしさよ　早崎　泰江
元日の満月仰ぐ静けさよ　定梶じょう
雪竿のたうとう見えずなりたるよ　佐藤　喜孝
辞書曰く兎は毛皮と肉だとよ　早崎　泰江
蝉の穴去年のままなる寂けさよ　須賀　敏子
梅雨明けるミニスカートの短かさよ　竹内　弘子
手花火の小さき火玉の重たさよ　山荘　慶子
嵐めき枝から垂れるふらここよ　佐藤　恭子
梅雨晴や蟻を踏まずにあるかうよ　竹内　弘子
咳込んで何か言はんとせし母よ　井上　石動
アカシアの花風のなか歩かうよ　佐藤　喜孝
白鳥の中に入ってゐる人よ　佐藤　喜孝
巨津波ウマシアシカビヒコヂノミコトよ　須賀　敏子
新米を二十キロとは妹よ　井上　石動
光塵と注連杉の雪吾に落ちよ　斉藤　裕子
再発告ぐ主治医の眼暑き日よ　佐藤　喜孝
いかれどもわらへどほうほうほおほけきょ　秋川　泉
ただながむ松の落葉のみごとさよ　須賀　敏子
生きるため生まれてきたの八月よ　須賀　敏子
長き夜をぼんやり過ごす嬉しさよ　七郎衛門吉保
柿右衛門白磁素肌の冷たさよ　黒澤　佳子
掘炬燵かくれ遊びと決める子よ　中川句寿夫
かにかくに社長は妻で父の日よ

あとがき

春になった。暖かくなった、と喜んでばかりゐられない。花粉症で気力が減退。

今月は**短文のお願ひ**おやすみします。

下石神井日録も休んだら再開の腰が上がらない。易きにつく習慣になってしまった。

上の写真は杉並区柿木図書館の自転車置場。いつ造られたのだらう。造られたときはきっと目を惹いたことと思ふ。残念なことに三月初旬図書館に行ったら取り払はれのっぺりとコンクリが打たれてゐた。

（喜孝）

二〇二三年三月号
発行日　三月二十五日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番 018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）